

## 『おもろさうし』のラ行四段動詞「おわる」の成立

迫野, 虔徳  
九州大学教授

<https://doi.org/10.15017/8919>

---

出版情報 : 語文研究. 99, pp.1-11, 2005-06-30. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 『おもろさうし』のラ行四段動詞「おわる」の成立

迫 野 虔 徳

一

現在の奄美・沖縄方言では、八行四段動詞をラ行四段化する地域が広く認められる。内間直仁氏『琉球方言文法の研究』(笠間 一九八四)によると、沖縄県本部町並里方言の「思つ」は、語幹は「omor」となり、次のように活用する。

志向形	未然形	条件形	命令形	連用形
?umura	?umura n	?umure;	?umure;	?umui

これは、奄美沖永良部島田皆・具志川市上江洲・浦添市小湾・伊是名村塾理客・本部町瀬底・東村有銘・与那城村平安

座・豊見城村饒波など奄美方言の一部、沖縄方言に広く行われているという。ただし、琉球方言全体が例外なくというわけではなく、喜界島志戸樋・大島名瀬市名瀬・瀬戸内町古仁屋・徳之島井之川・久米島島島・先島などは、omow 語幹である。また、動詞語彙によっても、若干相違があるようであるが、「買つ」「笑つ」「言つ」についても、内間氏によると、次のようになるという。

志向形	未然形	条件形	命令形	連用形
買つ	korra	koire;	korri	ko:i (上江洲)
笑つ	warara	warare;	warari	warai (小湾)
言つ	?ira	?ire;	?iri	?i: (小湾)

八行四段動詞のワ行化を経て、ラ行四段化したものと思われるが、『おもろさうし』においては、八行四段動詞は表記上は、まだ、八行ないしワ行四段のまま、このことから、八行四段動詞のラ行四段化は、おもろ以降と考えるべきとする見解が一般的に行われている（内間氏『琉球方言文法の研究』第1章 第5節「八行四段系動詞の通時的考察」等）。

仲宗根政善氏は、  
八行四段は、まだおもろでは、一般にラ行四段化していない。ただ「たほう」（賜う）の命令形「たほれ」の一例が異例として出ている。

として一つだけラ行四段化を思わせる例があることを指摘しておられる。ラ行四段化の唯一の例かというのは、次の例である。<sup>〔注〕</sup>

あが お嘉のお祝つきや 饒波のお祝つきや 牛乞わば 吾に  
たは 賜れ 又 下の世の主の按司の又の按司に（おもろ巻八・  
四四七 阿嘉のお祝つき、饒波のお祝つきは、お祈りをします。下の世の主が、按司の中の按司が、実に立派なことよ。按司様、牛をくださいと乞うたならば、ぜひ私にください。）

このことにやや関係があるものに、「オモロ」の語源の問題がある。外間守善氏は、

(1) 久志村汀間のウムイで「うむり」と「うむい」が同義語として謡われていること

(2) 国頭村阿波のオモリでは、「おもりぐわ」と「かなしぐわ」が同義語として謡われており、「かなしぐわ（愛し子）」と対応する「おもりぐわ」が「思い子」であることは明白で、これは、『おもろさうし』の「おもひ子」にあたる。

などの例を上げて、「オモロ」「思つ」説を唱えておられる。八行四段動詞「オモフ（ウ）」がラ行四段化して「ウムル」となり、大和風の表記に引かれて「オモロ」という字面になっているということである。

外間氏によると、『おもろさうし』以外の文献にも「オモル」というかたちが見られるということである。

僧袋中『琉球神道記』（一六〇五）中の「御唄」の文字に「オモリ」の振り仮名（第五巻）がある。

『中山世鑑』（一六五〇）「キミテスリト申ス八、天神也。国主世継ノ後、一代ニ一度、出現有テ、国主万歳ノ寿ヲシ給神也。二七ノ託遊也。ヲモル八其時ノ託宣也」（文脈から考えて、この「ヲモル」は、オモロと考えられる

と同じ)

『おもろさうし』は、巻第一は嘉靖一〇(一五三二)年成立、巻第二は万曆四一(一六一三)年、巻第三以降は天啓三(一六二三)年の成立で、このころ、八行四段動詞「思う」から、ラ行四段「オモル(ウムル)」ができていたと考えることもできるのではないかとこの立場のようである。

外間氏は、八行四段動詞のラ行四段化は、動詞連用形に「居り」が後接して、終止形と連体形の区別が失われる過程を経て成立したと考えておられるようで、次のように述べておられる。<sup>(注4)</sup>

現代琉球方言の八行四段動詞は、ラ行四段化していて、特異な形をみせているが、資料では、八・ワ行の混乱だけで、ラ行四段化のきざしは、あらわれていない。しかし、すべての動詞に複合する「居り」の当時の活力からすれば、「思ひ+居り」の複合によるラ行変格化が考えられ、更に、後述する終止形と連体形の統合によるラ行四段化への変遷を予想することができる。

ただし、八行四段動詞のラ行四段化は、外間氏のように「居り」の下接とその四段化というふうに考えるより、最近は、動詞活用システムの中で、語形態の音変化などのために活用段の動揺が生じ、連用形など一部の形態の相似が引き金

になり、類推変化を生じた、と考える人の方が多いのではないかと思う。

先引内間直仁氏(『琉球方言文法の研究』笠間一九八四)は、

思うの連用形が\*omofi omowi ?umuiと変化していく一方で、取るの連用形も\*tori tuiと変化していったものと解される。その結果、両者はその語幹末構造および語尾において全く同じになってしまった。加えて連用形は琉球方言において、その用法が多岐にわたっており、使用頻度も高い。そこで、両者の間には連用形を契機として容易に類推がはたらきえたものと推定される。

としておられる。また、高橋俊三氏<sup>(注5)</sup>は、

	未然形	連用形	接続形	進行形
問う	とわ	とい	とつて	とよる
通る	とら	とり	とつて	とらゆる
	tuura	tuui	tuuti	tuujuru
	tuura	tuui	tuuti	tuujuru

未然形・連用形・進行形の語幹は『おもろさうし』では

「と」であるが、首里方言では *tuu* である。これは音韻変化によるものではなく、「問う」の接続形「*tu*」と「通る」の接続形の「*tu*」が音韻的に同じであり、「通る」の語幹は「*to*」であるという意識により、「問う」の「*to*」も語幹であると類推し、未然形・連用形・進行形の語幹「*to*」を「*tu*」に置き換えて生じたものである。もするん」と「*tu*」が音韻的に近いということがこの置き換えを容易にしたであろう。これにより、「問う」の進行形が *tuujun* となり「通る」のそれと同じ形になった。さらに、「*ri*」の子音脱落現象が規則的に生ずるに及び、「問う」の連用形も *tuu* となり、「通る」のそれと同じ形になった。残された未然形「*to*」は長音+半母音という不安定で活用の不明確な形になり、(終止形・連体形などではもっと不明確な *tuun* となり)、その補強として、「通う」の「*tu*」の間に「*to*」が「*tu*」の間にある意識から、「問う」の「*tu*」の間に「*to*」が「*tu*」の間にある意識から、未然形の活用語尾「*wa*」を「*tu*」に替えた。かくしてラ行四段活用化が完成し、今日の首里方言では「問う」と「通る」は全く同じ活用になったと考えられる。

と、ラ行四段動詞との類推の結果と考えるおられる。

## 二

『おもしろさうし』に尊敬の動詞、補助動詞として「*o*」を用いた語が用いられている。これについては、仲宗根政善氏「おもろの尊敬動詞「*o*」について」(沖縄学の黎明 一九七六)という研究があるが、あくまでも敬語としての観点からの論述が中心になっている。しかし、この語については、同時にその形態面についても少し注意を払ってよいのではないかと思われる。

- (1) しより おわる てたこ(五・三九)
  - (2) みちへ おわれは きよらや つちえ おわれは みほしや(五・三九)
  - (3) みやこしま はちへ おわれ(一・三六)
- 「いらっしやる」という意の本動詞としての用法であるが、「*o*」は「*o*」で同様の意味を表すことがある。
- (4) あちおそいや いみやからと すゑまさて ちよわる  
(七・一六)
  - (5) 首里もり ちよわるノま玉もり ちよわる(一・一三)
  - (6) きこゑあんしおそいきや しよりもり ちよわれは  
けよも あちやも おみきやうよ おかむすかまさり

(七・四五)

(7) あんしおそいす とももすへ ちよわれ (一・一六)

(8) てにか した たいらけて ちよわれ (一・一)

「輝きおわれ」が「かかちよわれ」、「見おわれ」が「みよわれ」、「めしおわれ」が「めしよわれ」、「ふさいおわる」が「ふさよわる」のように融合変化する。

(9) 月 てたの やに てて かかちよわれ (八・六七)

(10) 系け 人 おそて みよわれ 又 うまかなし めしよわれ (一六・二二)

(11) あらかきの ねたかもりくすく てたか ふさよわるくすく (二・二二)

「かけおわれ」のように工段音の後では、「お」が脱落するところがある。イとエの区別がなおあったことを示す一証である。

(12) いと わたちへ かけわれ (三・一六)

この「おわる」が「おわす」から出たことは、はやくから指摘のあるとおりで疑いの余地のないものである。

「おもる<sup>おむ</sup>」には、「おわす」も同時によく使われていて、連用形(四段に活用させた可能性が大きい)は、「イ」のかたちになって、「て」に続いた場合、それを「チエ」と口蓋化している。

(1) くめのしま おわちへ (久米島) おわして 一一・七

○

(2) 世 そう せぢ もちよわち系 (世添うせぢ) 持ちおわして 五・二〇

「持ちおわして」のように工段音に「おわす」が続くときは「持ちよわいちえ」のように融合して「よ」になるが、工段音に続くときは「お」が脱落することは、先の「おわる」の場合と同じである。

(3) よりみちへに おわちへ (寄り満てに) 降れおわして 一・三四

次の例は、「い」の仮名になっているが、「ち」と融合していないのは、たしかに「イ」「エ」の音にまだ区別のあったことを示すものと思われる。

(4) たまよ そらいわちへ (玉を) 揃えおわして 一一・九

「来おわし」が「ちよわい」となるのも「おわる」の場合と同じである。

(5) かつれん しよさくもいかなし おなりえけり ちよわい かなしけき (一六・一九)

「来おわし居(を)る」が「ちよわよる」となるのは、「来おわし」の「し」が「イ」となるためで、これからすると「おわちえ」のような「て」に続いた「おわして」も含めて、サ

行イ音便のような形態変化ではなく、「シ」が「ヒ」を経て弱化して「イ」となった音韻変化と考えられる。(5)の「ちよわい(来おわし)」「の連用中止の「イ」のかたちもそのことを示しているものと思われる。

(6) あか なさか ちよわより もちろちへ こか きよ  
る きよらや (二・四三)

(7) のちまさり ちよわよる きよらや (九・一)  
ところで、「おわす」が四段活用であるとすると、未然形のかたちが問題になる。高橋俊三氏によると、『おもろさうし』の未然形は、

(a) 単独で文節を作り、推量・意志・勧誘の意を表す。終助詞「や」がついて詠嘆的に文を終わることや、終助詞「い」がついて軽い疑問をあらわして文を終わることもある。

あんは かみ てづら かみや あん まぶれ(私  
は神を祈ろう、神は私を守れ) (二の四五)  
やまといくさ よせらや(大和の軍勢が寄せて来る  
であろうよ) (一〇の三四)

かぐらおて ておりあずび しよらい(神の在所で  
手折り遊びをしているだろうか) (二二の二〇八)  
(b) 単独で文節をつくり、「とき・かず・ひと」などの名

詞を修飾する。

あける とし たた かす きみきみ てつて ぶ  
さよわれ(新年がやってくるであろうことに、神女  
様を祈って栄えませ) (二二の七四)

しよりかち いきや 人 あん かたれ(首里 地  
名 に行く人は私に語れ) (一三の二四三)

のよつになるといふ。「手擦ら」(手を擦らう・祈らう)、「寄せら」(寄せらう)、「しよら」(し居らう)、「たた かす」(たたう・立 かす・たび)、「いきや 人」(行かう 人、行かの「か」が前の「イ」の影響で「キヤ」と口蓋化している)のよつになるといふ。これによれば、『おわす』がサ行四段に活用するなら、『おわさ』のかたちになるところである。『おもろさうし』のサ行四段動詞についてみると、実際次のようになっている。

(8) ふなもとろ おしうけて いぢやさ かす せち そ  
わて はりやせ (一三・一六〇)

「出す」の語頭の「イ」の影響を受けて、次の「ダ」が「チヤ」になっているが、「出さ」の「サ」のかたちが残っている。

(9) おれほしやの あめそこ おれて おれなおさ (二五・  
四五)

(10) きこゑ さすかさが よけ よう よ なおせ せう  
なおさ (一〇・一二)

(11) まはゑ まはへ やおら おせ こかねくち はりや  
さ (一三・一三九)

「走らす」の未然形、「はしらさう」の「シ」が「イ」となり、次の「ら」を口蓋化して「はりやさ」となったもの。

未然形にはまた「仮定条件を表す助詞 ば がつく」が、この場合も、サ行四段であるなら、「サ」のかたちからつく。

(12) わたさは わたせ くださは くだせ (一八・二九)  
(13) 大にしに はりやさは なよくらす しりよわめ (三一・一五七)

「はりやさは」「は」「走らさば」「走る」の「シ」が「イ」になったため、後を口蓋化して「はイラさば」「はりやさば」となったもの。これによれば、当然、

(14) きこゑきみかなし せち はやしわわば せちにす  
おわめ (聞得大君かなしが、靈力を盛んにしたならば、

靈力にこそおわすである。六・一一)  
(15) きこゑせのきみや いのりやり ちよわば せのきみ  
しよ むはにせめ (二一・一四)

「は」「はやしわわば」「はやしわさば」(来おわさば)「となるはずのとこころである。」せちにすおわめ「や、次の例」ちよ

わめ「は」「おわさめ」「ちよわさめ」となるはずである。

(16) まみちけが おもろ すゑのくち まさしや ともも  
すゑ とひやくさす ちよわめ (五・五二)

「差す」というサ行四段動詞を例にとれば、その未然形は「さ」となり、当然「サ」のかたちを保つことになる。

(17) きみしゆ よのくき ささまへ (四・二三)  
この例の「まへ」は、助動詞「む」の已然形「め」を表記したものと解されていて、ここは、「君こそ 世のくき 門

を差すである」との意味になる。「おわす」のように、サ行四段に活用するはずの動詞でありながら、未然形にあるはずの「サ」のかたちを失うのは普通ではない。連体形も、

(18) ゑけりきや しよりおや国 おわとき 又 ゑけりき  
や あんしおやこに おわとき (一四・一一)

のように、サ行の音を失っており、命令形と思われるものも、「おわせ」の「セ」の音を失っている。

(19) おとちよもい つかよわ きこへ くるかりやよと  
りよわやり ふさよわ (おとちよ杜 使いおわせ 聞

こえ夜光貝を 取りおわしやれ 栄えおわせ 一三・四六)

これらからすると、琉球方言では、「おわす」はサ行四段活用というより、不変化の「おわ」のかたちで一般化したとみ



ることでもできる。

未然形	連用形	接続形	終止形	連体形	已然形	命令形
おわ	おわ	おわ	おわ	おわ	おわ	おわ

これは、「おわし」の「シ」が音韻変化により、「イ」となり、「おわい」のかたちでシラビームの音節構造の中で、十分な音節的位置を獲得することなく、「イ」を無視した「おわ」のかたちで一般的な認知を受けることになったものと思われる。

しかし、このかたちは、動詞(補助動詞)の活用としては、問題を含む。それをあらためて補正しようとしたのが「おわ」ではないかと思われる。「おわ」と「おわる」には、意味の増減はないようである。活用語としての機能の補正がはかられたとみるべきものと思われる。

未然形	連用形	接続形	終止形	連体形	已然形	命令形
おわる	おわる	おわれ	おわれ	おわれ	おわれ	おわれ

仲宗根政善氏は、「おわ」のかたちについて、

未然形「おわ」は、四段活用の「おはす」の未然形「お

はす」の「は」の脱落と見るべきか、ラ行四段化して、「おわら」となり、「さらに」ら」の脱落したものと見るべきか、明らかでない

と述べておられるが、「おわさ」の「さ」や、「おわら」の「ら」が、そんなに簡単に脱落するとは思われない。連用形の「おわして」などが「おわいちえ」となり、その頻用がこの語形を「おわ」というかたちにしてしまった。そして、そのかたちの不完全さが「おわる」というラ行四段動詞を生み出したとみるべきであろう。このラ行四段動詞化は、完全なものではなく、連体形や命令形において先行し、未然形や連用形は旧来の「おわす」系を根強く残す相補的な活用を作り上げたと見るべきであろう。連体形や命令形は、ラ行四段の「おわる」系を発達させながら、なお、「おわ」というサ行四段「おはす」に起源するかたちを保持していることからみて、「おわす」のもののかたちの不備が、「おわる」の新しいかたちを生み出したということが推測できるであろう。

### 三

連体形や命令形をも「おわ」というかたちで統一することの不自然さが、一般的な動詞として再度その活用を整備しよ

うとしたとき、ラ行四段のかたちを選択したのは、ごく自然な方向である。『おもろさうじ』の動詞活用は、一見するとこゝろ二段活用の一段化と思われるようなかたが多い。

- (1) なでる わは よせて (撫でる曲は寄せて 一・三四)
  - (2) やまとの かまくらに たとゑる (大和の鎌倉に喩える 一六・一八)
  - (3) よが あけるやに(夜があける様に 七・四一)
  - (4) ももしま ひきよせる わし (百鳥を引き寄せる鷲 二〇・一〇)
  - (5) したたりや よろい たるが にせる (直垂や鎧は誰が着て似せるか 二・一九)
  - (6) きりさびも つけるな かうさびも つけるな (塵錆も付けるな、粉錆も付けるな 三・一〇)
- 『おもろさうじ』の刊行(巻一は、嘉靖一〇年・一五三一)よりおかれて刊行された『ロドリゲス日本大文典』(長崎学林慶長九・一六〇四、慶長一三・一六〇八刊)には、いわゆる一段形は、「ただ、関東(Quanto)で用ゐられ、又都(Miaco)で一部の者に用ゐられてゐる。」と述べているだけで、本土方言の一段化はなお一般的ではなかったと思われる。それからすると、この『おもろさうじ』の状態は、目を見張らせるものがあるが、なおよく見ると、これは二段活用の一

段化というより、ラ行四段化の一部と見るべきことが、他の例から明らかに知られる。

- (1) きりさびも つけるな かうさびも つけるな (塵錆もつけるな、粉錆もつけるな 三・一〇)
- (2) しらよねに つければ 世よ中に つけれ (白米につければ 世よ中につけよ 一三・二一〇)
- (3) ももしま ひきよせる わし (百鳥を引き寄せる鷲 二〇・一〇)
- (4) かみがみず うらのかず いのりやゑて よせれ (神々こそ浦ごと祈つて集まる 六・四三)
- (5) やまといくさ よせらや (大和軍が寄せたならば 二〇・三四)
- (6) よしま よせれ (四島 寄せれ 一三・二〇九)
- (7) おみかうの おかめはの よが あける やに (お顔を拝めば、夜が明けるように 七・四一)
- (8) さやは しもはしり おしあけれよ ちやうのしゆ (斎場の遣り戸を押し開けよ 門の主 七・五)
- (9) こつては ゑらたな (ゑつては得ずに 一〇・三六)
- (10) しま ゑりきや ほしやす やへしま おわちやれ (島が欲しいからこそ 八重山島においでになったのだ 二一・一六)

(11) しま ゑれい 国 ゑれい おなりあんし (鳥(国)を得なさい神女 一四・一七)

(12) おれら かす まぶら (降りるたび 守護しよう 四・五四)

(13) おれる かす きみ はやす みこい (降りるたび 君 榮す御声 一・一・四三)

上一段動詞も四段化している。

(14) よしのうらの めづらしや けよから しばしば みらに (みたいものだ 二・二〇)

(15) まつ とり まわさたな いりおとちへ (射り落とし て 一四・六三)

『おもろさうし』の頃の琉球方言の動詞は、圧倒的なラ行四段化の傾向にあったことがわかる。このような中で、音韻的な原因からやがて活用のありかたにまで疑問をもたせるような変化が起きたとき、修復は、その大きな流れに沿ったかたちでなされるであろうことは当然予想できることである。

「おわして」「の」「シ」の弱化という音韻的な変化は、この動詞を「おわ」とするような動詞として異例のかたちに追い込んでしまうことになった。それを動詞システムの中でも安定したかたちに整備しようとするれば、「おわゑ」(ラ行四段)のかたちになるのがもっとも自然であったといつてよいであろう。

八行四段動詞のラ行四段化は、『おもろさうし』のころ、どのような状態であったかは、資料が十分でなく何とも判断しがたいことであるが、「おわして」が「おわ」のかたちになつていったと同じようなことが八行四段動詞にも起こつていたことが『おもろさうし』の表記からもある程度つかがえる。オモロは、ウムルであり、ウムウ(思)と関係があるとすると、十六世紀におもろとしてこれらの歌謡が収集されたころの琉球の日常語には、八行四段のラ行四段化がかなり進んでいったということも十分考えられる。

八行四段動詞のラ行四段化は、現在の琉球方言に広く見られる著しい特徴であるが、この現象と「おわゑ」の成立は、無関係ではない。むしろ、この問題を考えるよい手がかりになるのではないかと思われる。八行四段動詞のラ行四段化については、「居り」の後接による変化を考えるものがあり、また、連用形などの日常頻用されるかたちが音韻変化によつてラ行四段動詞のそれと相似形になつたということを強調するものがあった。「居り」の後接を考えるよりも、類推説の方に与したく思うが、単に発音の類似を強調するだけでは、この現象の大切な部分を見落とすことになるのではないかと思われる。上下二段動詞の終止・連体・已然の各活用形はラ行音で終わるものであるが、これらが一斉に四段化をめざ

本稿は、平成一六年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)の研究成果の一部である。

(さこの ふみのり・本学教授)

しているさまが『おもろさうし』にすでに認められる。この現象の原因や経過などについて、なお詳しい考察が必要であるが、「<sup>(注6)</sup> 駆流」とでもいうべきラ行四段化への大きな流れがあり、それが、琉球方言の動詞活用のあるかたに少なくない影響を与えているように思われる。なお、鹿児島方言にもっとも強く、熊本、長崎など九州本土西南方言にもかなり著しく認められる一、二段動詞の四段化は、この「駆流」に何らかの関連があるのかどうか、研究が求められるところである。

注

- 注1 仲宗根政善「おもろの尊敬動詞『おわる』について」(『沖縄学の黎明 伊波普猷生誕百年記念誌』(沖縄文化協会 一九七六))  
注2 読み、口語訳は、外間守善校注『おもろさうし』(岩波文庫二〇〇〇)による。  
注3 外間守善「沖縄の言葉と歴史」第三章 沖縄古語の語源を探る 才モロの語源」(中央公論新社 二〇〇〇)  
注4 外間守善「中世文献にあらわれた 琉球方言の動詞」(国語学41輯 一九六〇)  
注5 高橋俊三『おもろさうしの国語学的研究』武蔵野書院 一九九一  
注6 八行四段動詞のラ行五段活用化は、東北地方にも見られるように、あわせて考察すべき問題である。大西拓一郎「岩手県種市町平内方言の用言の活用」(国立国語研究所報告一一〇